

『中華若木詩抄』にみる「漢字句（漢語）」の 理解について

古 田 雅 憲

Comprehension of the Kango in "Chūka-jakuboku-shishō"

Masanori Furuta

本稿は別に明らかにした『中華若木詩抄』所載「漢字句（漢語）」の和らげに関する一覧資料の解釈に相当するものである。すなわち本抄に現れる「漢字句（漢語）」と、その「字句」の、注釈に際しての取り扱いのありようについて、一定の傾向の存在を指摘しようとするものである。その傾きというのは、主として、当該「漢字句」の本抄原典中での使用頻度や、また、他の文献での使用状況とに関するものである。

1-1 漢詩の分析

漢詩をその構造にしたがって分析していけば、自ずから二字以上のセットとして機能している部分と、単独で機能している部分とに「腑分け」されるであろう。

例えば本抄30番「遠山帰鳥図」では

「独鳥去辺山似眉／天低水濶影遅々／上林雖好非栖処／一任千枝与万枝」

という漢詩中から

〈独鳥〉〈去辺〉〈山〉〈似眉〉〈天低〉〈水濶〉〈影〉〈遅々〉〈上林〉〈雖〉〈好〉〈非〉〈栖／栖処〉〈処〉〈一任〉〈千枝〉〈与〉〈万枝〉

のような「要素」を取り出せよう。むろん詩題からも〈遠山〉〈帰鳥〉〈図〉のように取り出せようか。

- * 漢詩の番号は亀井孝氏『語学資料としての中華若木詩抄（校本）』（清文堂 1977）に従う。
- * 調査の資料は亀井校本に従って「古活字版17行本」を用いた。いうまでもなく、本稿の一連の作業の目指すことは当該資料における「漢字句（漢語）」理解に関する実態の整理であって、それは「当時」の様相を明らかにすることの第一歩ということになる。
- * 例えば〈去辺〉などは諸辞（字）書の「漢字熟語〈キョヘン〉」としては採録せぬものであるが、本稿ではこのような類も考察の対象としていくこととする。当面の課題は、抄物が注釈書としてどの様な和らげを行っているか、「漢字のセット」と抄文中の表現との関係の分析にあるのであって、〈去辺〉なりなんんりの「漢字のセット」が「漢字熟語」として定着するかいなかはその後のことに属する。標題に「漢語」でなく「漢字句」の和らげについて、と称する由縁である。
- * 〈非栖処〉は「セイジョニアラズ」と読むべきものであって、従って〈非〉〈栖処〉と分析するのが当然か。とはいえ、そのように読むべきであるとは知っていればこそであって、全くの無知の状態にこれに接すれば「ヒセイノトコロ」として「理解」も出来よう。このように両様に分析しうるもの、かりにそれが中世語の常識に反していてもそれはとりあえず採集することにする。例えば〈無用処〉は〈無〉〈用処〉が普通であっても、とりあえ

ず〈無用〉〈処〉もとっておこうというのである。

事実、次に示すような場合がある。

「啼得血流無用処」（漢詩番号1）について「ナイテモ無用処也」あるいは「ツイシヨウカ無用也」の抄を見いだす。ここは「用処無キ也」と読むのが最も正格であろうが、実際の意味理解については、むしろ漢文の修養に際して正確な「読み」が「理解」そのものであったという側面を十々弁えつつも、ここが「用処」「無い」であろうと「無用」の「処」であろうと融通が利いたということであろうか。そのようなことを思うとき、とりあえず〈無〉〈用処〉と〈無用〉〈処〉の両様を指摘しておくことは必ずしも不当でないと考えるものである。

さて、30番の抄文全体は次の通り。

遠山へ鳥ノ帰ル処ヲ画ニカキタル賛也／一ノ句一鳥ノ帰ル辺ハ山色カ眉ヲホソホソト掃／タヤウナ也似眉ト云カ遠山ノナリソ／二ノ句ハ水ト天トヒトツノヤウナソ水ノ上ノ天ハ／一段ヒロキヤウナルソ下ヘタレタヤウナソ水ハヒロキ／ヤウナルソ其上ヲヒラヒラトイツキモセスヲソク飛ソ／水ノ上ハ必鳥モヤソク見ユルソ帰鳥ノ躰言外／ニアラワレタリ／三四ノ句上林ハ内裡ノ苑也上林ナントハスミ／ヨサウナ処ソコトニチカチカトアレハト遠山トハチカウタ／シカレトモ此鳥ナントハスムヘキ処ニテハナイ也然／レハ上林ニヨキスミ処ノ千枝モ万枝モアルソレハサ／モアラハアラウマテ更々一枝モ孤鳥ノ用ニハタタ／ヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソソコニ述懐ノ心アリ／

1-2 抄文との対照

この抄文中の表現と、さきに分析した漢詩の諸部分と対照を一覧すれば次の通り。

- 〈遠山〉 遠山へ鳥ノ帰ル処ヲ画ニカキタル賛也
似眉ト云カ遠山ノナリソ
コトニチカチカトアレハト遠山トハチカウタ
孤鳥ノ用ニハタタヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソ
- 〈帰鳥〉 遠山へ鳥ノ帰ル処ヲ画ニカキタル賛也
一鳥ノ帰ル辺ハ山色カ眉ヲホソホソト掃タヤウナ也
帰鳥ノ躰言外ニアラワレタリ
孤鳥ノ用ニハタタヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソ
- 〈図〉 遠山へ鳥ノ帰ル処ヲ画ニカキタル賛也
- 〈独鳥〉 遠山へ鳥ノ帰ル処ヲ画ニカキタル賛也
一鳥ノ帰ル辺ハ山色カ眉ヲホソホソト掃タヤウナ也
孤鳥ノ用ニハタタヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソ
- 〈去辺〉 一鳥ノ帰ル辺ハ山色カ眉ヲホソホソト掃タヤウナ也
孤鳥ノ用ニハタタヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソ
- 〈山〉 遠山へ鳥ノ帰ル処ヲ画ニカキタル賛也
一鳥ノ帰ル辺ハ山色カ眉ヲホソホソト掃タヤウナ也
似眉ト云カ遠山ノナリソ

コトニチカチカトアレハト遠山トハチカウタ
孤鳥ノ用ニハタタヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソ

- 〈似眉〉 一鳥ノ帰ル辺ハ山色カ眉ヲホソホソト掃タヤウナ也
似眉ト云カ遠山ノナリソ
- 〈天低〉 水ト天トヒトツノヤウナソ水ノ上ノ天ハ一段ヒロキヤウナルソ下ヘタレタヤウナソ水
ハヒロキヤウナルソ
- 〈水潤〉 水ト天トヒトツノヤウナソ水ノ上ノ天ハ一段ヒロキヤウナルソ下ヘタレタヤウナソ水
ハヒロキヤウナルソ
- 〈影〉 其上ヲヒラヒラトイソキモセスヲソク飛ソ水ノ上ハ必鳥モヲソク見ユルソ帰鳥ノ躰言
外ニアラワレタリ
- 〈遅々〉 其上ヲヒラヒラトイソキモセスヲソク飛ソ水ノ上ハ必鳥モヲソク見ユルソ
- 〈上林〉 上林ハ内裡ノ苑也上林ナントハスミヨサウナ処ソ
- 〈雖〉 上林ナントハスミヨサウナ処ソコトニチカチカトアレハト遠山トハチカウタシカレト
モ此鳥ナントハスムヘキ処ニテハナイ也
- 〈好〉 上林ナントハスミヨサウナ処ソコトニチカチカトアレハト遠山トハチカウタシカレト
モ此鳥ナントハスムヘキ処ニテハナイ也
- 〈非〉 シカレトモ此鳥ナントハスムヘキ処ニテハナイ也
- 〈栖処〉 上林ナントハスミヨサウナ処ソコトニチカチカトアレハト遠山トハチカウタシカレト
モ此鳥ナントハスムヘキ処ニテハナイ也
- 〈非栖〉 上林ナントハスミヨサウナ処ソコトニチカチカトアレハト遠山トハチカウタシカレト
モ此鳥ナントハスムヘキ処ニテハナイ也
- 〈一任〉 上林ニヨキスミ処ノ千枝モ万枝モアルソレハサモアラハアラウマテ更々一枝モ孤鳥ノ
用ニハタタヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソ
- 〈千枝〉 上林ニヨキスミ処ノ千枝モ万枝モアルソレハサモアラハアラウマテ更々一枝モ孤鳥ノ
用ニハタタヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソ
- 〈与〉 上林ニヨキスミ処ノ千枝モ万枝モアルソレハサモアラハアラウマテ更々一枝モ孤鳥ノ
用ニハタタヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソ
- 〈万枝〉 上林ニヨキスミ処ノ千枝モ万枝モアルソレハサモアラハアラウマテ更々一枝モ孤鳥ノ
用ニハタタヌホトニ遠山ヘハルハル帰ソ

1-3 「漢字句」の「型」分類

様々の「漢字句」について、その対応する抄文中でそれらの「漢字句」がどのように取り扱われているかを整理していくと、そこにいくつかのパターンが存すると知れる。

例えば、〈遠山〉〈千枝〉〈万枝〉は、別表現に言い替えられることなく対応する抄文中にそのままの姿で現れている。特に〈遠山〉などは複数回にわたってそのようである。本来的には注釈がなされて当然であろう抄物にあって、これらの「漢字句」は、なお、和らげを受けずに

過ごされているのである。

一方、〈遅々〉〈上林〉〈非栖〉〈一任〉などは、それぞれ対応する抄文中において「イソキモセスヲソク」「内裡ノ苑」「スムヘキ処ニテナイ」「ソレハサモアラハアラウマテ」のような表現として現れ、すなわち、注釈に際して原姿を大きく離れざるをえないものようである。

また〈帰鳥〉は、「帰鳥ノ躰言外ニアラワレタリ」のように、そのまま現れて来る場合もあるが、「鳥ノ帰ル処ヲ…」あるいは「一鳥ノ帰ル辺ハ…」「孤鳥ノ…ハルハル帰ソ」のように、〈帰鳥〉＝〈鳥〉…〈帰ル〉という形に言い替えられて現れるのが本来のようである。そのように、注釈に際して、本の「漢字句」の一部を利用するような形で対処されるものがある。これに類するものとして〈独鳥〉＝〈一鳥〉〈孤鳥〉、〈去辺〉＝〈…帰ル〉〈辺〉、〈似眉〉＝〈眉ヲ…〉〈…ト掃タヤウナ〉、〈天低〉＝〈天ハ…〉〈下ヘタレタ〉、〈水濶〉＝〈水ハ〉〈ヒロキヤウナル〉、〈栖処〉＝〈スムヘキ〉〈処ニテ〉を指摘することが出来よう。

これらの原典の漢詩中の「字句」に対する注釈のパタンに、順にa型、c型、b型と仮に名付けておくことにするが、「漢字句」ごとに、注釈に際しての対処の仕方の違いが出て来るのには、いったいどのような背景があり、抄者のどのような判断があったのか。そのあたりを考えてみようというのである。

- * これらの他に、「漢字句」に対応するべき抄文が存在しないもの、すなわち、注釈に当たって全く触れられていない（むろん注釈文中にも現れられてこない）「漢字句」も少なからず存在しているようである。これらのものを仮にo型と名付けておくことにする。
- * 〈似眉〉については「似眉ト云カ遠山ノナリソ」のような和らげをみるが、これは「文脈的な注」とでもいうべきものであって、先の〈遅々〉〈上林〉の類とは別と考えるものである。例えば「只因偏愛海棠睡」（漢詩番号125番）中の「海棠」について「海棠ハ花ノ貴妃ト云ソ」のような和らげが付されるのも同様であろう。この類を仮にx型と名付けておくことにする。
- * a, b, c, o, xの異なる和らげかたが、一つの「漢字句」の和らげに際して組み合わせられて用いられるような場合（全てのパタンが出揃うようなことはないが）は、その「漢字句」はc型で和らげられているものと認定する。すなわち、 $c > b > a > x > o$ の順に「漢字句」との対応関係を優先的に認定しようということである。
- * また人名、地名、建物名などいわゆる固有名称については仮にs型として別に考えるべきものとした。
- * またa'型を別に掲げた。これは例えば「知有人家夜読書」（53番）の〈読書〉に対応して「コレハ人ノ読書テ居ル者ソ」と注釈が付されるようなものである。この抄文が「…ヒトノショヲヨミテイルモノゾ」であることは明らかなことであって、本来的には「読書」と返り点が付されているはずのものである。〈読書〉はこの他に「知有人家夜読書」（21番）、「灯火幾家人読書」（257番）にみえ、それぞれに「年カヨリテ懶ナルホトニ読書事ハナイ」、「イカナル人家ニモ…読書也」という和らげが付されているわけだが、前者は「…ホトニショヲヨミゴトハナイ」であり、また後者は「イカナルジンカニモ…ショヲヨムナリ」であろう。いずれも「ショヲヨム」すなわち「読書」と割って理解されているものでありながらも、の字面の上ではすべて「読>書」と提示されることを目のあたりにするとき、その〈読書〉が先の〈遠山〉〈千枝〉などに準じて取り扱われて良いのではないかと考えるのである。

そのような立場を採るとき、「昨夜雨声今夜春」（20番）の〈雨声〉に対応する「昨夜マテハ寒雨ノ声カト…」という注釈中の「雨ノ声」、あるいは「不知老去歌声短」（139

番)の〈歌声〉に対応する抄文「啼鶯モ…老ハテテ歌フ声モ短キソ」中の「歌フ声」、また「天長海闊応難問」(116番)中の〈天長〉に対する抄文「天モ長ク海モヒロウシテ…」中の「天モ長ク」なども、〈遠山〉などに準じて良いのではないかと考えられて来るのである。すなわち「遠キ山」と〈遠山〉との距離はそう遠いものではないといわねばならない。

*〈囟〉〈山〉〈影〉〈雖〉〈好〉〈非〉〈処〉〈与〉などの一字で機能しているとみられるものについても同様の作業を行うが、これについては別稿において報告したいと思う。

2-1 注釈の「型」と比率

本抄の全体で3516件（延べ語数）の「漢字句」が分析されるのだが、それらの「漢字句」の注釈に際しての取り扱われかた、それぞれの「型」の場合数を示せば以下の表のとおりである。

a 型	a'型	b 型	c 型	o 型	x 型	計	s 型	総計
811 (26.7)	114 (3.8)	1311 (43.2)	656 (21.6)	96 (3.2)	50 (1.6)	3038 (100.0)	259 (—)	3516 (—)

本抄の注釈に際して、b型の和らげ、すなわち原典中の「漢字句」の一部を利用するような、あるいは漢字の字順を前後入れ換えたりするような形での和らげが多くを占めるということが明らかである。原典の「漢字句」を完全に別表現に言い換えたc型の和らげとあわせて、おおむね3分の2の「漢字句」に対して、なんらかの形での和らげが施されていることになる。

2-2 a 型＝和らげを与えられない「漢字句」

ところで問題になるのは、全体の3割程度を占めているa型と見なされる「漢字句」である。これらの「漢字句」は注釈に際して、なんら、和らげを与えられることなく、そのままの姿で抄文中に用いられるものである。抄物が注釈である限りにおいては和らげを施すのが当りまえのことであろうのに、それを与えられないということに、どのような背景と抄者の判断があったのか。

2-3 a/a'型「漢字句」の特徴〈出現頻度との関わり〉

これらの注釈に際して和らげを与えられなかった「漢字句」の特徴について、まずは「漢字句」の出現頻度が関わっているものようである。

たとえば〈梅花〉は、原典の漢詩中に最も多く現われ、35/4, 60/3, 65/4, 70/4, 73/4, 115/0, 125/4, 149/4, 194/0, 197/4, 209/0, 209/3, 227/3, 231/1（亀井孝氏による漢詩番号/1～4句の別、0は詩題）の合計14回にわたって見いだされる。それらのうち3回は「梅ハ…雪裡ニ開クル物ナルカ…」(60/3)あるいは「年アケテ後花カ多キト…梅ハ…」(115/0)あるいは「梅ハ孤芳皓潔ナル者ニテ…」(194/0)といった形で和らげ（b型）が付され、その中で〈梅花〉というセットは分解されている。しかしながら、そのほかの場合については、例えば「梅花カ六月ニ開ケイテハナラヌ也」(65/4)、「ココモト村々皆梅花」(70/4)、「梅花カア

ルホトニ行テ見ンタメニ…」(73/4), 「梅花尽ク落也」(125/4), 「梅花籬落ノ西ノ…」(149/4), 「梅花カ第一番ニ開テヨリ次第二…」(197/4), 「タヒヤ辺ニアル梅花也」(209/0), 「梅花ハ行人ヲ笑ワントシテ…」(209/3), 「梅花ヲ愛シテ風流ナル御人ソ」(227/3), 「梅花ヲ尋テ…物語リセント思テ」(231/1) のように十一回については〈梅花〉はそのままの形で抄文中に取り込まれているのである。

また〈三千〉は〈梅花〉について多く10回, 8/4, 35/3, 52/3, 113/1, 128/3, 137/4, 138/8, 145/3, 248/4, 260/3のように出現している。これらの全てが, その対応する抄文においてそのままの形〈三千〉として用いられているのである。すなわち「天帝ノ盃ノシタタレカ三千尺ノ瀑ト…」(8/4) あるいは「ヤカテ白髪三千丈トナルソ」(52/3) あるいは「月ノ夜ハ三千世界へ満タル」(248/4) などのようである。

ついで〈東風〉は38/3, 69/3, 77/2, 87/1, 133/4, 175/2, 199/4, 216/1, 229/3のように9回現れるが, そのうち「世上東風唯九句」(133/4) について「過ス中ニモ春ハ唯九十日也」と注されていて, 結果c型と見なすべき和らげがあり, また「日暮東風春草緑」(69/3) について「秋霜ニ草枯レ春風ニ草生シテ…」と注されていて, 結果b型と見なすべき和らげがあるが, それらを除く7例は「コノ雪ハ東風カ吹タラハ消スヘキカ」(38/3) あるいは「東風カ意アリカラニ吹カセウシソ」(77/2) のように「東風」のセットのままに抄文中に用いられている。

同様に〈春風〉(8回中7回はa型), 〈天下〉(7回ともa型), 〈白雲〉(7回ともa型), 〈白頭〉(7回中5回がa型) のようなことがあり, したがって原典の漢詩のなかで出現頻度の高い「漢字句」とそれが和らげを受けず, そのまま過ごされることとの間にはなにかしら関連がありそうなどころである。そのような観点から和らげのかたと出現頻度との関係を表にすれば次の通りの数値を得ることが出来る。

	a	a'	b	c	x	o	計
1	436 (20.9)	79 (3.8)	995 (47.6)	482 (23.1)	36 (1.7)	61 (2.9)	2089 (100.0)
2	155 (31.6)	22 (4.5)	201 (41.0)	93 (19.0)	6 (1.2)	13 (2.7)	490 (100.0)
3	66 (39.3)	5 (3.0)	52 (31.0)	31 (18.4)	4 (2.4)	10 (6.0)	168 (100.0)
4以上	175 (56.1)	8 (2.6)	63 (20.2)	50 (16.0)	4 (1.3)	12 (3.8)	312 (100.0)

(延べ語数調査)

出現頻度1回の「漢字句」2089件(それはそのまま異なり語数ともなるが)中, 995件は注釈に際してb型とみられる対応を受け, 482件のc型の場合と併せて全体のほぼ7割方は, 注釈に際してなんらかの言い替えを受けていることになる。そのなかで和らげを受けることなく, 抄文中にそのまま用いられる「漢字句」は436件, 21%を数える。

そのような状況の中で, 出現頻度4回以上の「漢字句」については, その56%にあたる175件(異なり語数で38語)が注釈に際してもなんら言い替えを受けぬまま, そのままの姿で抄文中に使われる様相を呈し, 先の場合とは一変するところである。a型の対応を受けているとみられる「漢字句」の数値を順に読んでいけば, $20.9 < 31.6 < 39.3 < 56.1\%$ のように, 出現頻度

に比例していることが窺われ、やはり、出現頻度の高い「漢字句」、いわば本抄の中で目慣れたものについては、注釈に際して必ずしも和らげを施すことなく、抄文中にそのままの姿で取り込むということがなされるといえる。それらの「漢字句」を、個々の抄文中における対応のかたとともに示せば次の通りである。

〈頻度六回以上〉

梅花 (aaaaaaaabb) 三千 (aaaaaaaa) 春風 (aaaaaab) 東風 (aaaaabc)
白頭 (aaaaabbo) 明朝 (aaaabbbc) 天下 (aaaaaaa) 白雲 (aaaaaaa) 一夜 (aabbo)
江南 (aaaaaa) 山中 (aaaaoo) 春色 (aabbo) 夕陽 (aaaabo) 白髮 (aaaaab)
風流 (aaaacc)

〈頻度五回〉

海棠 (aaaxx) 功名 (aaaab) 青山 (aaaaa) 梨花 (aaaaaa)

〈頻度四回〉

一様 (aaac) 一声 (aaaa) 英雄 (aaac) 黄金 (aaaa) 花影 (a'a'a'a) 去年 (aaaa)
溪辺 (aaab) 江湖 (aaaa) 黄昏 (aaaa) 蓑衣 (aaa'b) 少年 (aaaa) 人家 (aaaa')
西風 (aaaa) 丹青 (aaac) 日暮 (aaa'o) 万里 (aaaa) 牡丹 (aaaa) 夜雨 (aab)
楊柳 (aaab)

いま一つ指摘されるべき事柄は、「漢字句」の一部分を利用する形での対応（b型）が出現頻度に反比例して、 $47.6 > 41.0 > 31.0 > 20.2\%$ のように順次少なくなっていくということ、そして、その一方で、出現頻度の高い「漢字句」であっても、c型に分類されるものの数値は決して急激には低下していないということである。すなわち完全に言い替える形での和らげは「漢字句」の出現頻度と必ずしも相関しない、何度現れてもその都度和らげを受けなければならぬものがあるということである。それらの「漢字句」を個々の和らげのかたとともに示せば次の通りである。

〈出現頻度六回以上〉

何処 (bbcccc) 如何 (bbcccc) 不知 (bbbcccc) 落花 (bbbbb)

〈出現頻度五回〉

扇面 (bbboo) 当時 (bbbco) 不覚 (ccccc) 不如 (ccccc)

〈出現頻度四回〉

燕子 (bbbo) 看花 (bbbb) 画図 (abbb) 幾回 (cccc) 春日 (abbb) 人間 (abcc)
晚来 (bbbb) 無処 (bccc) 夢中 (abbb) 老去 (bccc)

むろん、このなかでも〈何処〉〈如何〉〈不如〉〈幾回〉などはそもそも今日の感覚にも「漢語」と認めがたく、分割して、あるいは全く別表現をもって注釈されるのが自然のことであろうし、また日葡辞書（詩歌語）に採録されるような「漢語」であっても、〈燕子〉の〈子〉などは尊称としてそのまま日本語にはなにくわろう。同様、仏法語として採録される「漢語」でも、〈不知〉などは、本抄では〈不〉を〈…ズ〉と宛てるのが通例らしく、結果、いつものうちに和らげられるといったことが起きているらしい。要するに、本抄原典の漢詩中に見える「漢字句」は、多く、その一部を利用する形での和らげが与えられるのであるが、そのうちにも、出現頻度の高いものは和らげを与えられぬまま過ごされることがあり、ただ、その一方で、なにかしら個々の事情によるものか、出現頻度の高さにも関わらず和らげを与えられず

はすまされぬ、そんな「漢字句」が確固として存在していることなどが指摘されねばなるまい。本抄の注釈は、よく目にする「漢字句」については、特別にこだわるべきもの以外、和らげを与えずに済ますという「合理的」な態度をとっているらしいということである。

問題は、それらの「漢字句」の、当時にあつての「語勢」とでも云うべき側面か。すなわち、目慣れたものでありながら常に別の表現にいい替えられねばならない「漢字句」とは、あるいは、和らげを与えられぬまま過ごされてしまう「漢字句」とは、それぞれに当時にあつて、言葉としてはどのような「存在」であつたのかという問題である。

2-4 a/a'型「漢字句」の特徴 〈そのほかの資料での使用状況から〉

その場合、時代的な問題からも、また資料の性格からも、やはり「日葡辞書」での採録状況が気になるところである。「日葡」がその「漢字句」を「漢語」として採録しているか否か、あるいは、そのほか節用集を中心として古辞書群にどのような様相で現れて来るか、また、そのほかの文献資料における用例の多寡など、考察の対象となるフィールドは余りに広い。「日葡」については優れた索引を使うにしても、それ以外の範囲については、便宜的に「小学館日本国語大辞典」を使うことをもって、大概の様相を窺うに留めるしかあるまい。ともあれ、本抄の「漢字句」の用例としての広がりを見れば、次の表に示すような結果が得られた。

	a/a'型	b型	c型	x型	o型	合計
日葡辞書採録	390件 (58.2)	164件 (24.3)	87件 (13.0)	10件 (1.6)	19件 (2.8)	670件 (100.0)
日葡（詩歌語等）採録	98件 (52.1)	54件 (28.2)	25件 (13.8)	2件 (1.1)	7件 (4.8)	186件 (100.0)
日葡未収 節用集等採録	62件 (30.1)	58件 (28.2)	69件 (33.5)	11件 (5.3)	6件 (2.9)	206件 (100.0)
日葡・節用集等未収 「小学館」「大漢和」採録	285件 (25.8)	546件 (49.5)	219件 (19.8)	19件 (1.7)	35件 (3.2)	1104件 (100.0)
「小学館」「大漢和」未収	88件 (10.1)	489件 (56.1)	256件 (29.4)	2件 (0.2)	29件 (3.3)	871件 (100.0)

「小学館」などに文献資料の用例とともに「漢語」として採録されながらも、日葡や古辞書群に載せぬ「漢字句」については、その7割のものが本抄注釈に際してbあるいはc型の和らげを与えられていることを考えれば、やはり日葡辞書（詩歌語等の所収分も含めて）に「漢語」として採録するような「漢字句」の、本抄においても、和らげを与えられずに済まされる場合の多いこと（58%）が窺えるところである。

さらに複数回出現するような「漢字句」について、和らげを与えられることが多いものと、与えられぬことが多いものとを分けて、それぞれの、「漢語」としての用例の広がりを確認すれば次のようである。

もはや述べるまでもないが、日葡辞書（詩歌語等も含めて）に「漢語」として採録されるような「漢字句」は、やはり本抄においても、言い替えを与えられることなくそのまま抄文中に用いられるものごとくである。日葡辞書の「漢語」採録の方針がすでに説かれるものよう

	多く、和らげ られぬもの	多く、和らげ られるもの
日葡辞書採録	70語	34語
日葡（詩歌語等）採録	15語	9語
日葡未収 節用集等採録	17語	14語
日葡・節用集等未収 「小学館」「大漢和」採録	23語	75語
「小学館」「大漢和」未収	6語	43語
合 計	121語	176語

である限りにおいて、本抄の注釈に際して言い替えられることなくそのままの姿で抄文中に取り込まれる「漢字句」というものも、当時あっては、比較的に通用の程度の高い「漢語」であったといわねばならない。すなわち本抄の注釈は、やはり、当時の「漢語」の通用の程度を背景として踏まえ、むろん、抄物であるが故に和らげることを原則としながらも、和らげの不要なものについては、そのままの姿で抄文中に用いるといったような対処の仕方を行っていると見えるのである。

もっとも、ことはそう単純ではなく、「漢字句（漢語）」一つ一つについて、その「語勢」とでもいうべき点を確認しなければならない。ここでは大雑把な数量的把握しかおこなえなかった。が、ともあれ、本抄の注釈の実態から、当時あって「漢語」（あるいは「漢字セット」というべきか）としての通用度合の比較的高かったと目される「漢字句」121セットを以下に示しておく。

*一年 *一夢 *一夜 (aaabbo) *一樣 (aaac) 十一竿 @一蓑 (aab) *一声 (aaaa)
 *一盃 #一片 (aao) *隱者 @雨声 *英雄 (aaac) *鴛鴦 (aax) +烟霞 *遠山
 *黄金 (aaaa) +花影 (a'a'a'a') *海棠 (aaaxx) @荷花 ?何事 (aab) ?何人 (aao)
 @寒衣 *杏花 *胸中 *去年 (aaaa) *金錢 @金鈴 *工夫 @閨中
 +溪辺 (aab) @月明 (aab) *江湖 (aaaa) +黄昏 (aaaa) *紅紫 #行人
 *江天 (aab) *高堂 @功名 (aaaab) *紅葉 *今日 (aao) @五百 (aaa)
 @蓑衣 (aaa'b) @柴扉 *昨夜 (aaa) *三月 ?山深 @三千 (aaaaaaaaa)
 *山中 (aaaaoo) @四五 (aab) *詩人 (aab) *次第 *七十 *芍藥 *終日
 *愁人 (aac) @十二 (aac) *秋風 *酒家 +春色 (aaabbo) +春風 (aaaaaab)
 *少年 (aaaa) *人家 (aaa'a') @新雁 ?十丈 @十年 *丈夫 +人生 (aab)
 *青山 (aaaaa) *西風 (aaaa) *夕陽 (aaaabo) *世間 (aab) *千声 *霜雪
 +丹青 (aaac) *天下 (aaaaaaa) *天地 (aaa) *桃花 (aaa) *灯火 *頭上
 *東風 (aaaaabc) +桃李 *読書 (a'a'a') *杜鵑 *二月 (aaa) *日々
 @日暮 (aaa'o) *白雲 (aaaaaaa) *白鷗 +白頭 (aaaabbo) *白髮 (aaaaab) #白牡丹
 *梅花 (aaaaaaaaabbb) #梅月 #瀑布 (aaa) *芭蕉 *晚風 *万里 (aaaa) @飛去
 @百尺 *美人 *白骨 *風雨 (aaa) *富貴 @風吹 *風流 (aaaacc) @不帰 (aac)
 *文章 (aaa) *北山 *牡丹 (aaaa) @滿山 *明朝 (aaaabbbc) +朦朧 +夜雨 (aab)
 +野花 @夜深 *楊柳 (aab) ?乱後 +梨花 (aaaaa) #六月 (aaa)

- * 〈日葡辞書所収のものは*印を付している。〉
- + 〈日葡（詩歌語等）所収のものは+印を付している。〉
- # 〈日葡未収、節用集等古辞書に所収するものは#印を付している。〉
- @ 〈日葡、古辞書等未収、「小学館日本国語大辞典」「大修館大漢和辞典」所収のものは@印を付している。〉
- ? 〈「大漢和辞典」未収のものは?印を付している。〉

2-5 多く和らげを与えられる「漢字句」

そして、その一方で、例えば次のような「漢字句」は、その出現回数の内、多く、和らげを与えずにはいられぬものようである。

?易違(cc) @依然(cc) ?為僧(bb) *一枝(abo) *一杯(bbb) @一半(bbb)
 @引水(bbb) *有情(cc) +宇宙(cc) *駄路(bc) +燕子(bbbo) @応制(bc)
 ?桜雪(bb) @回首(bb) @花逕(bb) *花枝(bb) @佳処(bb) ?何処(bbcccc)
 #佳人(aco) @看花(bbbb) ?還断(cc) ?観瀑(bb) ?看来(co) *画図(abbb)
 ?幾回(cccc) *帰去(a'bb) @帰耕(bb) ?帰時(bb) ?客去(bb) *旧主(bb)
 *鏡中(abb) *帰路(bb) #区々(cc) *溪山(abx) ?見花(bb) ?見梅(bb)
 +月色(bb) @月白(bb) ?紅埃(bc) @紅雨(abb) *行客(bb) @公子(bb)
 @紅粧(bb) *古人(bb) @香雪(bc) #黄*8(cc) @孤負(ccc) #今宵(bb)
 ?三請(bb) *残紅(bc) *残雪(abb) #子規(ccc) ?只合(bc) ?只在(co)
 ?始信(bb) @秋来(bb) *主人(abx) +須臾(cc) @春陰(bbb) +春日(abbb)
 @春城(bo) @小雨(bb) *將軍(axx) ?焼得(bc) *処々(ccc) @新涼(cc)
 +寂々(cc) @杖藜(bb) @如何(bbcccc) @如今(bo) #人間(abcc) @誰家(bcc)
 ?水濶(bo) @醉眼(bb) #醉吟(bb) @水竹(abb) @吹落(a'bb) @数尺(bb)
 @成空(bc) @青春(bc) @清賞(bc) @晴雪(bb) ?西畔(abo) @世縁(bb)
 ?接花(bb) @扇面(bbboo) ?相宜(bc) @相思(bb) *蒼苔(ab) @早知(bb)
 #僧都(xx) @相逢(bc) @相忘(a'bb) @村壚(oo) @对酌(cc) @戴笠(bb)
 *多少(ccc) #多情(abc) @濯足(bbb) ?奈何(cc) @題画(oo) @題詩(bc)
 ?知有(cc) @釣台(bb) ?底事(bb) #顛狂(cc) @天晴(bb) *当時(bbbco)
 *当年(co) ?得成(cc) @東関(bb) @都門(abb) #独立(bc) ?難禁(cc)
 @日西(bb) ?入夢(bb) ?年後(bbb) *年来(bb) *白雪(bb) *白鳥(bb)
 ?莫言(coo) ?莫道(ccc) *薄命(cc) @半百(cc) @晚来(bbbb) ?罷釣(bb)
 #飛絮(bb) @飛上(abc) ?百篇(bb) *微風(bb) +風前(bbo) *不覚(ccccc)
 ?不及(bc) @不識(bcc) ?不如(ccccc) @不是(cco) ?不掃(bb) @不多(bc)
 ?不帶(cc) @不度(cc) +不知(bbbccco) @不到(bcc) @不落(bc) *無事(cc)
 +無声(bb) @秉燭(bb) ?別有(bc) @別来(bb) @髣髴(cc) @忘婦(bb)
 @望夫(bbo) *暮雪(bb) ?埋苔(bb) @未曾(bc) @未知(bc) @未必(ccc)
 @無烟(bb) @無花(bb) @無処(bccc) #無情(cc) *夢中(abbb) @有意(bc)
 @有時(bb) ?有花(bb) #幽居(bc) @養魚(bb) *用処(bc) ?欲試(bb)
 @落尽(bc) *落梅(bb) *落葉(bb) *落花(bbbbbc) ?覽鏡(bb) @両三(bc)
 @老去(bccc) ?和月(bb)

これらの「漢字句」についての検討が必要であるが、いま、多くを語るべき言葉を持たない。ただ、これらの「漢字句」を眺めつつ感じることは、〈不…〉〈莫…〉〈無…〉〈未…〉〈相…〉〈…来〉といった構造のもの多さであり、また〈春〉〈花〉〈雪〉〈風〉〈雨〉〈苔〉〈月〉〈夢〉〈白〉〈紅〉〈鏡〉〈婦〉〈落〉などの字が目立つことである。いうまでもなく前者はその語構成においてきわめて特徴的なものであるし、また、後者の漢字達は、その一字一字が明確な印象をもって使われうるようなものである。あるいは、そのあたりにこれらの「漢字句」の、本抄において多くセットを解かれることの一因が存するかもしれない。

以上、『中華若木詩抄』古活字17行版を使って、原典「漢字句」の注釈に際しての取り扱われかたを通して、「漢語」としての通用の程度ということに考えを巡らしてみた。むろん「古活字17行版」での様相の一端が明らかになったということであって、そのまま「当時」のそれが明らかになったというつもりはない。それを明らかにしていくためには諸本の対校による成果を踏まえねばならない。そのようなことについてはまた別稿に述べることになる。

参 考 文 献

- 亀井 孝氏 『語学資料としての中華若木詩抄』（1977 清文堂）
森田 武氏 『日葡辞書提要』（1993 清文堂）
同 『天草版平家物語難語句解の研究』（1982 清文堂）
福島邦道氏 「キリシタン資料の語彙」（『講座日本語の語彙4 中世の語彙』）
柳田征司氏 「抄物の語彙」（『講座日本語の語彙4 中世の語彙』）
大塚光信氏 「抄物文」（岩波講座日本語10 文体）
三上悠紀夫氏 「中華若木詩抄の二字漢語サ変動詞語彙について」（1971 国語国文学15）
拙稿 「中華若木詩抄に現れる漢字句（漢語）とその和らげかた」（1994 文教国文学32）

一平成6年9月26日 受理一